

19世紀アメリカ英語における “A long letter was sent him” 型構文・再考

The Non-prepositional Second Passive in 19th Century American English

藤内 響子

要 約

いわゆる授与動詞の3種類の受身文に関しては、アメリカ英語の特徴とするか否かでいくつもの文法書間に意見の対立がみられる。そこで本稿においては、19世紀から20世紀初頭のアメリカ英語文献を調査対象としてこの構文を調査し、現代英語と比較しながら、歴史的にはどちらの意見が言語の実態に近いのかを明らかにする。

I

‘give’ や ‘send’ のようないわゆる授与動詞には3種類の受身文が考えられる。例えば、*She sent him a long letter* の受身文は(1)のようになる。

- (1) a. He was sent a long letter.
b. A long letter was sent to him.
c. A long letter was sent him.

(1)の3つの受身文のうち、1aは間接目的語を主語に取る構文であり、1bおよび1cは直接目的語を主語に取る構文である。それぞれ、主語にならなかったほうの目的語は、保留目的語として文中に残る。このうち、1bと1cに関して、いくつかの文法書間で意見の対立が見られるため、調査を行い、結果を藤内(2001)で述べた。

その内容を簡単にまとめると次のようになる。文法書間の意見の対立は、いずれかが誤っているということではなく、1950年以降の数十年で、アメリカ英語において特に1c型が置かれた状況に変化が生じた為に発生した可能性が高く、その変化には1a型が深く関わっていると考えられる。そこで、新たに、19世紀以降のアメリカ英語における1a型の変遷、および、イギリス英語における3型の状況について調査する必要が出てきた。その後、藤内(2007)で、19世紀のアメリカ英語における、1a型の状況を調査してみた。本稿においては、更に現代英語における調査も併せて考えて、アメリカ英語における“A long letter was sent him”型構文について再考してみたいと思う。

調査に用いたテキストは、19世紀から20世紀初頭までの合計21点である。(2)に刊行年代順に挙げる。

(2)

Irving:	<i>The Legend of the Sleepy Hollow</i> (1819 1820)
Poe:	<i>The Fall of the Home of the Usher</i> (1839)
Emerson:	<i>The Young American</i> (1844)
Hawthorne:	<i>The Scarlet Letter</i> (1850)
Melville:	<i>Moby-Dick</i> (1851)
Thoreau:	<i>Walden, or Life in the Woods</i> (1854)
Stowe:	<i>Uncle Tom's Cabin</i> (1852) <i>Soujourner Truth, The Libyan Sibyl</i> (1863)
Alger:	<i>Ragged Dick and Struggling Upward</i> (1868)
Alcott:	<i>Little Women</i> (1868) <i>Good Wives</i> (1869)
Twain:	<i>The Adventure of Thomas Sawyer</i> (1876) <i>The Adventure of Huckleberry Finn</i> (1884)
Burnett:	<i>Little Lord Fauntleroy</i> (1886) <i>The Little Princess</i> (1888)
Bierce:	<i>Can Such Things Be?</i> (1893)
Crane:	<i>The Red Budge of Courage</i> (1895)
H.James:	<i>Turn of the Screw</i> (1898)
Chopin:	<i>The Awakening</i> (1899)
Dreiser:	<i>Sister Carrie</i> (1900)
London:	<i>The Call of the Wild</i> (1903)

調査した動詞は、授与動詞のうち、間接目的語を文末に移動した場合に to を要求するものであり、A.S.Hornby: *A Guide to Patterns and Usage in English* 等を参考にして選んだ。調査結果をまとめたものが(3)の表 1 である。括弧内の数字は、保留目的語が代名詞である例を示し

ている。

(3)

表 1	1a 型	to あり (1b 型)	to なし (1c 型)
afford	0	0	3(3)
allot	0	3(2)	0
allow	7	1(0)	4(1)
award	0	0	0
bring	0	4(4)	2(2)
deny	7	3(2)	3(3)
do	1	1(0)	3(2)
fetch	0	0	0
forbid	0	0	0
give	8	38(13)	22(21)
grant	0	1(1)	1(1)
hand	0	4(2)	2(2)
lend	0	2(2)	0
offer	4	2(1)	3(3)
owe	0	0	0
pass	0	1(0)	0
pay	0	1(0)	0
permit	0	0	1(1)
proffer	0	0	0
promise	1	0	0
read	0	0	0
refuse	0	1(0)	0
render	0	0	1(1)
restore	0	5(4)	0
sell	0	7(1)	0
send	0	12(5)	2(2)
show	2	0	1(1)
spare	5	1(0)	1(1)
teach	8	0	2(2)
tell	29	1(0)	2(2)
write	0	1(1)	0
計	72	89(38)	53(48)

全用例214例のうち、1a型は72例 (33.6%)、1b型は89例 (41.6%)、1c型は53例 (24.8%) である。現在では、3種類の型の中で最も自然

な形とされている1a型は、他の2つよりも遅れて登場し、17、8世紀から良く使われるようになったとされているが、19世紀の段階ですでに他の2つと遜色なく使用されていることがわかる。また、括弧内に目を向けてみると、1cタイプの用例のうち実に9割以上が保留目的語に代名詞をとっており、主に代名詞用の構文という側面を持つことも分かる。

表1と比較するために、*Nothing But You* という、1997年発行の38人の作家の手からなる短編集を現代英語のテキストとして用いた。調査の結果は、(4)の表2の通りである。

(4)

表2	1a型	toあり (1b型)	toなし (1c型)
allow	1	0	0
deny	1	0	0
forbid	0	1(1)	0
give	8	0	0
hand	1	0	0
offer	3	1(0)	0
pay	0	1(0)	0
refuse	1	0	0
sell	1	1(0)	0
send	1	2(1)	0
tell	2	0	0
計	19	6(2)	0

残念ながら、全部で25例と用例数は余り多くないので、断定は困難かもしれないが大体の傾向は確認できると思われる。その25例中、1a型が19例と全体の約8割を占め圧倒的である。1b型は6例、一方、toのない形式である1c型は、保留目的語が代名詞である用例があるにもかかわらず、一例も存在していない。

表1と表2、2つの表を比較すると次のよう

なことが考えられる。1c型構文は殆ど代名詞としか用いられないという特殊な性質のため、遅れて出てきた間接目的語を主語にする2a型構文の拡大の勢いに2b型よりも遥かに大きな影響を受け、その結果、「現代のアメリカ英語においては不自然」と文法書に書かれるまでに稀な型になってしまったのである。最初に述べた、いくつかの文法書間にみられる意見の対立は、やはり、それぞれが出版された当時のアメリカ英語の現実を反映していたために起こったものと結論付けることが出来る。

参考文献

(本稿で言及したものに留める)

- Angell Roger (ed.). 1997. *Nothing But You: Love Stories from the New Yorker*. New York: Random House. 448pp.
- Hornby, A. S. 1954. *A Guide to Patterns and Usage in English Grammar*. London: Oxford Univ. Press.
- 藤内響子 2001. 「19世紀アメリカ英語における“A long letter was sent him”型構文」九州情報大学研究論集 第3巻 第1号 pp. 71-75.
- 藤内響子 2007. 「19世紀アメリカ英語における間接受動文について」九州情報大学研究論集 第9巻 第1号 pp.47-48.